

2021 年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」選考経過と選考結果

2021 年度の「若手研究者奨励賞」の選考過程と選考結果をご報告申し上げます。21 件の応募があり、4 名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の 7 名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に講評をいただきましたので、あわせてご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 工藤恵理子

受賞者（応募順）

野間 紘久 (のま ひろく)	抑うつスキーマの機能的側面による非機能的な帰結：スキーマの維持メカニズムの解明	広島大学大学院 人間社会科学研究科 博士課程前期 2 年
松村 楓 (まつむら かえで)	無知の自覚が社会政策に対する態度の緩和に及ぼす影響 一 個人実験及び小集団討議実験による検討一	大阪市立大学大学院 前期博士課程 1 年
宮崎 聖人 (みやざき まさと)	一般的信頼および見知らぬ他者と協力する傾向が両方高く学習される条件の検討	北海道大学大学院 文学院 修士課程 1 年
高橋 茉優 (たかはし まゆ)	社会保障はなぜ崩壊しないのか 一 デフォルトの効果とマキシミン選好に着目して一	東京大学大学院 修士課程 1 年
岡田 葦生 (おかだ あしゅう)	政治的会話回避の要因としての多元的無知	京都大学大学院 法学研究科 博士後期課程 2 回生
李 述氷 (り じゅつひょう)	社会的排斥経験が相互協調的自己観を形成する生物学的なメカニズムの解明	玉川大学大学院 修士 2 年
森 隆太郎 (もり りゅうたろう)	「協力する気のある人しかここにはいない？」：集合行為を支える自主的な参加のメカニズムの検討	東京大学大学院 人文社会系研究科 修士 1 年

「選考過程」

7月5日に募集開始をホームページで告知し、メールニュースでも会員に告知した。締め切りは例年通り9月30日とした。

2) 選考委員選出と一次審査

応募総数21件に対し一次審査を行った。選考委員は応募書類に記載された指導教員を除いて、理事から1名、一般会員から3名をについて常任理事会の承認を得て依頼した。

選考委員（敬称略）

理事より：浦光博（追手門学院大学）

一般会員より：内田由紀子（京都大学）、中西大輔（広島修道大学）

森久美子（関西学院大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、この時点では選考委員は互いに匿名で審査をおこなった。各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与するものであった。なお、A評価は各委員7本以内とした。また、1名の選考委員から1件の応募に対して、利害関係の申告があり、その応募について当該選考委員は審査に加わらなかった。

3) 第二次審査

第一次審査結果について従来の得点換算方法に従い、A評価を40点、B評価を10点、C評価を5点とし、各応募について合計得点を算出し、その後メールでの審議を行った。

この時点で同順位となった応募に対して再度順位付けを行った。最終的に上位7件を受賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

以上

2021年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評

浦光博先生（追手門学院大学）

研究計画の評価の視点にはさまざまなものがあるだろうと思いますが、今回私が重視したのはテーマの斬新さと計画の手堅さの2つです（おそらく多くの方がこの2つの視点で評価されるのではないかと思います）。これらの視点で今回の応募書類を見ると、斬新かつ手堅い計画のものもあり、逆に斬新でもなければ手堅さも評価できないものも残念ながら見受けられました。これら2つの差は実にはっきりしていて、前者はすべてあるいはほとんどの審査者から高く評価され一次審査の段階で授賞対象となり、後者はすべてあるいはほとんどの審査者が低く評価し一次審査の段階で授賞候補に残りませんでした。

難しかったのは、手堅いけど斬新さが今ひとつのものと、斬新だけれども手堅さが今ひとつのものとの評価です。どちらかに重きを置かないと差をつけにくくなります。今回私は

斬新さの方をやや重視して一次評価を行いました。全体の評価結果を見ると、そのような研究計画については評価が割れていました。審査者によってどちらを重視するのかに差があることの表れだと思います。

これらのことが示唆しているのは、確実に高い評価を得るためには斬新さと手堅さの両立を目指さなければならないということです。これは当たり前のことのように思われるかもしれませんが、若手とカテゴライズされる研究者にとってはかなり高いハードルではないかと思います。そんな中でも、今回提案された研究計画の多くがこの高いハードルを越えることを、少なくとも目指してはいたように見え、心強く感じたことも確かです。若手のみなさんのさらなる健闘を期待しています。

内田由紀子先生（京都大学）

今年度はじめてこちらの審査に携わらせていただきました。研究の将来を担う若手の関心事がどのようなところにあるのかを知ることができるのは、とても興味深く、役得だなあと思いながら審査を行わせていただきました。

研究の方向性や方法論が多様化しているためか、評価者間で意見が分かれたところもありました。コロナ禍を経て、オンライン実験の手法が定着してきたことも実感しました。しかしながら、データや分析の可能性が広がったとしても、どのような理論的な背景に立脚して自分なりの「問い」をたてて研究を行うのか、そうしたポイントを明確に論じられていたものが必ずしも多かったわけではありませんでした。理論は大きいけれども実際の細かいところが詰め切れていないとか、逆に細かいところは整理できているが理論的な視点や発展性がはっきりしないということもありました。これらは実際にはとても難しく、研究計画を立てるときに常に頭と時間を使うところです。受賞が決まった7件のテーマはいずれも目的と方法も明確であるということが一貫していたと思います。これからの若手研究者の発展を楽しみにしております。

中西大輔先生（広島修道大学）

若手研究者奨励賞の審査をはじめ担当しました。主観的には大学院生時代からほとんど成長がなく、ずっと若手のつもりでいたので「僕自身が若手なのに、どうして依頼が来るのか」と悩むくらい、自分が既に初老（なんと辞書的には40歳!）と呼ばれる年齢を超えていることに気づいておらず、愕然としたものです。それはともかく、「本物の若手」の研究者の計画を拝見するというのはたいへん楽しい作業でした。

私は勝手に、社会心理学の根本問題はマイクロ=マクロの循環過程の解明にあると思っていますが、奨励賞に選ばれなかったものも含めて、そういった問題関心を持っているものが数多く見られて社会心理の未来は明るいなと思うことができました。大学院生時代に講座の恩師たちから「社会心理学に未来はない」という嘆きを繰り返し聞いてきましたが、審査が終わった今では「いや、案外いけるかもしれない」と思っています。もちろん「未来はない」という危機感がよい研究の刺激となったのも間違いのないでしょう。ただ、再現性問題を踏まえた事前登録の実施やデータの公開について述べられていたものが1件だけだったというのは少し気になります。事前登録やデータの公開が当たり前

になればいいなと考えています。

大学院生が減っているという問題もあるようで、学会として引き続き若い人たちにとってよい環境を作っていく必要性を感じています。次年度以降もたくさんの意欲的な若手研究者からの応募を期待しています。

森久美子先生（関西学院大学）

若手研究者奨励賞の審査に携わるのは今年度が初めてでした。申請書は工夫が凝らされた高い水準のものが多く、たくさんの新鮮なアイデアに触れることができたのは委員として大きな喜びでした。一方で、選考過程では絞り込みに難しさを感じました。研究意義の明確さや面白さ、研究方法の工夫や妥当性を念頭に評価しましたが、迷ったときには「その研究独自の魅力が際立つ研究」に惹かれました。実際、多くの委員から共通して高く評価された研究は、研究目的を読んだだけで、その研究が解こうとしている問の面白さが明確に伝わってくるものであったと思います。もちろんどの研究計画も、その領域内での研究の意義についてはしっかり訴えておられたと思うのですが、バックグラウンドの異なる複数の委員全体に伝えるためには、自分の研究のインパクトがどこにあるのかについて、当該領域だけでなくやや広い視野の下で自覚的である必要があるのかなと感じました。採択とならなかった研究にも優れた緻密な計画や社会貢献性の高い計画がありました。それぞれの先生方のご研究の成果が実り、発信されることを期待しています。

以上